ムーンメモリア・ロストノイズ

二十三話：流星の如く

雨和七瀬

　平坦な道が続いていたにも関わらず、一行は断崖絶壁の上で足を止めた。

「着いたっすよ、ここが星降りの荒れ地っす」

　ルークが崖下を俯瞰すると、『異物』と思しき金属塊が大量に降り注いだまま放置されていることに気付いたが、それだけではない。

（あの金属塊は形状から見て『外殻鋼』だが……もしやこの窪んだ地形、異物の落下の衝撃でできたのか……？）

　ルークは手帳を取り出し、この異様な光景を書き留めていく。それをよそに、ブランカは目の前に広がる景色を見て呆気に取られていた。

「すごくキラキラしてる……」

　至る所に突き刺さったままの異物、『外殻鋼』が偶に差し込む陽光を反射する様を見て、ブランカもまた目を輝かせていた。

「オレとしてはもっと曇ってくれるとありがたいんだけどなぁ」

　ユノは眩しそうに目を細めて崖を覗き込んだ。

「……魔物、居るか？」

　ユノが目を凝らしながら訊ねる。ブランカは中心の方を指さして「あの動いてるのは？」とユノに聞くが、ユノは「ありゃあ小さい竜だろ」と答えた。

「前来たときはわんさか居て、命からがら逃げ帰って来たんすけど、今日は少ないっすね。やっぱ竜もロス……魔物と戦ってるんすかね」

　ライは頬を掻きつつ、ふと何か思ったことがあるようでルークをじっと見つめた。ルークは一通り記し終えてからライの視線に答えた。

「……何かあるなら言え」

「……魔術師が居るなら箒で降りられるな、と思って」

　ルークは思わずユノの方を見た。するとユノも話を聞いていたようで、少し顔に焦りが滲んでいた。

「降りる道とか無いやつか？」

「あっちの方にオレが普段使ってる縄ならあるんすけど」

　ライの指した方向を見ると、丈夫そうな縄が崖の淵からぶら下がっていた。それを伝って降りている、ということが見て取れた。ユノは「それならオレはそっち使いたい」と力強く主張したが、ブランカはルークの元へ近づき、小声で囁いた。

「……私、箒の方が良いです」

「……だろうな」

　青ざめた顔のブランカにルークも呟くように返したが、自身も頭の中で降りられるという確証を得られなかった。

「じゃあ二手に分かれるのはどうすかね、慣れない移動方法だと時間食っちまいますし」

　戦力が分散する危うさと移動のしやすさを天秤に掛け、渋々頷いた。

「そうだな。ではあの赤い塊の下で待っていてくれ」

「ん？　箒の方が速いと思うんすけど……了解っす。行きましょ、ユノさん」

　ユノとライの背を見送り、見なくても分かるほどにそわそわとしているブランカの方を向く。なるべく顔に出さないようにしているが、頬が出っ張っていて笑みを隠しきれていなかった。

「……期待させているようだが、そんな良いものでもないぞ。上手くいかない日は振り落とされることもあるくらいだ」

　気乗りはしないものの、ルークは箒を取り出し、ブランカに渡した。

「柄の後ろ側に跨って待ってろ」

「？　はい」

　ブランカは穂先スレスレの部分に跨った。柄を握る手は何故か様になっていたが、ルークは気に留める余裕もなく、深呼吸をして自身を奮い立たせた。

「……俺が乗ったら、どうなってもまずは足を交差させて、右手を前に出せ。俺が手を掴んだら、もう片方の手を出して自分の手首を掴め。良いな？」

「は、はい！　足、右手、左手ですね」

「そうだ。よし……」

　ルークはなるべく箒に触れないように跨り、腰を下ろすのと同時に両手で柄を掴んだ。するとルークの魔力に反応して箒は上へと上がろうとする力を得た。

「わぁ、すご……」

　ブランカは感嘆の声を上げ、ルークの指示通り足を動かした。想定よりも余裕のあるゆったりとした箒の動きに、ルークは詰まっていた息を吐きだし、ブランカが手を伸ばすのを待った。

「とはいえ、慎重に……、ッ！」

　それも束の間、箒は先端を大きく上げ、左右に振れ始めた。

（まずい、ブランカは……！）

　ルークが後ろを向こうとしたとき、腹に何かが当たった。咄嗟に手で掴み、脇を締めて保持してみると、ブランカの腕だった。この一瞬で腕を伸ばしたのだ、とルークはブランカの反射的な動きの良さに感心しつつ、ブランカに声を掛けた。

「左手は無理に離すな、箒が水平か前傾になったら伸ばせ」

「ひゃ、ひゃい……」

　後ろから聞こえてくる声は明らかに上ずっており、ルークは恐怖を払拭する術を探した。

「……万が一に備えて、防御魔法を張っておこう」
「ひゃい、おねがいしまふ」
　ルークはブランカの手を掴んだ右手を柄の方まで下げ、ブランカの手と共に柄を握り、左手を伸ばした。
「――〈シェルダール〉」
　魔力の殻で周りを包む様を想像しながら防御魔法を展開させると、二人を箒ごと包む球状の魔力壁が出来上がった。それと同時に、箒は落ち着きを取り戻し、水平に戻った。
「今のうちだ、手を……」
「は、はい」
　まずは差し出された左腕を脇で挟む。右手を離し、ブランカがルークの腹の前で手首同士を掴んだのを確認すると、ルークは箒の柄を握り直した。
「……気を緩めるな」
　ブランカに言ったのか自分に言い聞かせたのか、ルークはまた深呼吸を一つして箒を前に進めた。崖を飛び出た瞬間、箒は震え出した。そして。
　――崖壁に沿うように高速で下降し始めた。
　ルークはいつものように柄を握りしめ、魔力を込めて制御を試みる。つい先ほど張った防御魔法によってある程度の余裕を持って臨んだものの、やはりいつものように上手くいかない。
（一人で乗ったときと同じ、低空飛行か……この箒の悪い癖が出たな）
　ルークは腕の力で無理やり柄の先端を上げようとするが、箒は進路を左に変えつつ相変わらず崖スレスレを飛んだ。
「ぶ、ぶつかりませんかこれ！」
　ブランカがルークの背後で崖を避けるように体を右に傾けているのが、声の聞こえてくる方向から推測できた。
「そんな暴れ方はしないはずだが……」
　懸念点は、段々と見えてきた崖に張り付く人影。
（二人にだけじゃない、縄にぶつかっても事故は避けられない。空中を飛びたくないなら……）
　ルークは右手に力を込めながら左手を離した。箒はまた上下左右に揺れようとし始めるが、右手一つで最小限に抑え込む。
「其れは土、大地より出で、我らを導かん……〈テレフロッタ〉！」
　ルークが少し先に向けて魔法を発動させると、魔力が岩や土を構築し、空中に浮かぶ地面が出来上がった。箒は突然現れた地面に向かって速度を落としながら飛び、地面の上でピタリと止まった。ちょうど崖の上から垂れている縄が目の前で揺れていた。
「おーい、大丈夫かー？」

天から降る声にルークが見上げると、ユノが縄を身体に巻きつけ、壁に足を置きながら降りているのが見えた。ちょうど箒の止まった高さでユノは一度手を止め、目一杯振り向いて二人の様子を確認した。
「多少暴走したが、問題ない」
「ならよーし。できればオレも使える足場を用意してくれりゃよかったのに」
ユノは軽口を叩きながら、またスルスルと降りていった。下を覗くと、既に降り切っているライがルーク達を見上げていた。
「……また箒の動きが乱れる可能性がある。ブランカ、しっかり掴まっていろ」
「はい……あの」
ルークは耳だけ傾けた。
「箒乗るの、ドキドキして楽しいですね」
「……正気か？」
ルークは耳を疑ったが、後ろから「えへへ～」と更に聞こえてきたので、ブランカの胆力に驚かされるばかりであった。

その後も崖に沿って転がり落ちるように箒で降り、ライの元へ辿り着いた頃にはルークは満身創痍であった。
「ユノさんは辺りを索敵しに行ったっす」
ライがそれに続いて「あー、箒じゃなくてよかった……」と小さく呟いたのはルークにも聞こえていたが、ルークには返す言葉も無かった。
「近くで見てみると、この真っ赤な鉄の塊がピカピカ光っていたとは思えないですね」
「……この赤いの、何かと思えば鉄の錆みたいっすね」
ライは金属塊に近づこうとするブランカの腕を掴んで引き止めた。ルークは箒を鞄に押し込めると、二人と同じように外殻鋼の柱に近づいた。
「周囲を見ても同じようになっている外殻鋼は少ない……風雨に晒された影響では無さそうだ」
ルークが辺りを見回していると、ユノが慌てて駆け戻ってくるのが見えた。
「やばいやばいやばい、竜が鉄屑食ってる！」
『異物』の摂食。ルークの脳裏には異形と化したアオガネトカゲが過った。
「……その顔を見るに、だいぶまずい状況っすね？」
「はい、竜の皆さんがおかしくなっちゃうかもしれませんん……！」
ブランカも同じ光景を思い出したのか、険しい表情を浮かべながら薙槍を握りしめた。ルークも手袋のはまり具合を整え、ユノに声を掛けた。
「すぐに向かおう、案内を頼む」
「おう、こっちだ！」

　ルークは竜と戦闘になることも念頭に置きつつ、ライやブランカと共にユノを追いかける。
（竜の生態は知性があることを除けば魔物と大きく差は無い。手遅れかも知れない……しかしボード村に出た魔物の正体が竜だとも考えにくい）
　ルークが思考を巡らせながら走っていると、竜が地面に突き刺さった金属に群がっているのと同時に、何か小さいものが蠢いているのが見えてきた。
「うげ、さっきは居なかったのに魔物が湧いてやがる！」
　遠目で見ると小さな金属片にしか見えなかったが、ユノが血相を変えて銃を構えたのを見てルークも魔法を発動する準備を始めた。
「あの魔物、村に出た奴と同じっすね。オレじゃ歯が立たないんで、道具で支援するっすよ」
　ルークが狙いを定めていると、ライが横に立ち、鞄から預けた魔石などを取り出した。
「そうしてくれるのは有難いが、数歩下がっていろ」
　ライは「策でもあるんすか」と疑問を抱きつつもルークの視界の端から消えた。それを確認すると、ルークはまたユノとブランカが対面しているであろう魔物に狙いを定める。
「其れは炎。光を生み、数多を包み込む――〈フレアール〉！」
　ルークの声と共に、ユノはブランカに「下がれ！」と声を掛けながら後退する。ブランカも慌てて踵を返して数歩。金属片にばねのような脚が生えた魔物がブランカに飛び掛かるのと同時に、それら魔物全てが噴き上がった炎に包まれた。その熱によって体の融けゆく魔物の動きは緩慢になり、融けた金属は地に滴り落ちていった。
「う、噂通りものすごく強い……」
　ライの独り言にルークは一瞬意識を向けたが、炎が消えてもなおドロドロとまだ自我を持つように動く融解した金属に目を向けた。次の一撃を放つべく手をかざしていたが、金属はそのまま冷え固まって動きを止めた。
「こーいう時はルークの魔法で一発だな……じゃなくて、竜だ、竜」
　ユノはルークの元まで歩み寄っていたが、本来の火急の用を思い出して小竜の集まる金属塊へと駆けていった。ルークもそれに合わせて竜の元へ近づいて行った。
（見たところ、外見に大きな変化は無いが、気を引き締めなければ。……話が通じればいいんだが）
　ルークは左手で腰に提げた剣の鞘を、抜くことにならないよう願いながら掴んだ。

〈二十四話へ続く〉